蜘　蛛　片　々

堀　　關　夫
東京都足立區本木町一ノ一一二七

クサグモのの出廬 *Agelena limbata* Thorell の卵嚢は御承知のように多角形で厚く出來てゐて雨も雪どけ水も透りません。これを引きむしろうとするのに私なぞは顔を赤くして引張らなければならない程です。この袋をか弱い仔蜘蛛がどうして破り出るのでしようか。昆蟲が自分の繭を破り出るのに色んな様式をもつてゐます。爬蟲類，鳥類の卵殼破壞，さては哺乳類の胎盤脱出，色んな様式のあることは誰でも知つてゐます。自ら殼を食ひ破る動物には口器に特殊の裝置を持つてゐるのがあります。それは一旦殼を破り出た後には不用器官となつて剝落するのです。然し食ひ破り直後に落ちてしまうのではありません。クサグモに斯うした器官が有るか否かを私は知りません。其の一時的の器官を持つてゐる間は何回でも殼を破ることが出來るものでしようか。或は一回の食ひ破りで其の本能は消滅してしまうのでしようか。先年ニワトリに就いて試驗したことがあります。卵から孵つた雛を又卵殼の中に入れてしまふのです。卵嘴は未だ落ちないのに二度破り出ることは出來ません。破殼には非常な勢力が必要なのですから二度繰り返すことは力以上なのでしよう。で破殼の疲勞が十分恢復した雛を再び殼に入れてやつても，破り出ようとする行動に出ないのでした。ウズラも同じです。クサグモの仔供は卵嚢を食ひ破つて出るのです。中には四十匹ばかりの仔供がゐるのですが，皆が食ひ破る本能をもつてゐるのでしようか。そうだとすれば袋に多數の穴が開いてゐなければなりません。出ればいゝ，それで目的が達するのだ，穴を見付けたら出ればよいのだ，と見廻つてゐるのだとすれば永久に出口が開けない譯です。然し出ます。穴から穴は一つです。多數の仔供の中には榮養不良や發育不全のものもゐるでしよう。然し野生の動物は飼養動物ほどの發育差が普通には無いのです。すると穴一つしかないのは何故でしよう。一戰士が全員を代表して食ひ破るのか，籤を引き當てたものが不精不精に破るのか，これは面白い問題と考へられます。中が見えないのですから快い苦勞も必要となります。更に一回食ひ破つた仔供は二度同じことを繰り返さぬものでしようか。これも知りたいことです。然しこれは大した

苦勞せずに觀察出來ます。第一番に袋から出たクモ仔が食ひ破つたものだとは限りません。多分そうだと思はれますが，そうでないのかも知れません。で第七番目位までの中には嚙んだクモがゐると豫想します。順々に七匹を摑まへて再度袋に入れ口を閉めてみればいゝのです。何でもないことです。確に何でもないことです。卵嚢を三四個机上に置き，空の袋を七個用意します。何日何時何分に出るとは決定してはゐません。何でもないことです。何時でもござんなれと何日間も睨んでをればいゝ譯です。確になんでもないことです。

このクモの若い時代にはとても敏捷です。それに指でつまんだりピンセットで挾んだりすることは止めなければなりません。何か傷害を與へないとは限りませんから。不具になつたのや負傷したものを試驗したのでは何にもなりません。何でもないことです。手や器具を觸れなければよいのです。即ち第二次の空卵嚢の穴を幾分大きくし，すぐ塞げるようにして待つのです。そして出て來たものは自然に袋に入る，すると穴を塞ぐのです。神經をとがらし目を光らし指を素早く働かし汗をかく位のことは何でもありません。このようにして第二次の袋に入れられたクモは皆自分で食ひ破つて出て行きます。然しこれでは自分々々に破る能力を持つてゐるのだとは證明された筈ですが，第一次の卵嚢を破つたクモは七匹の中にゐないのかも知れないのです。出る時の素振りなぞからして多分そうだらうと思ふに過ぎないのです。そうでないとの證據はないのです。こんなことは何でもないのです。未だ穴を開けられない卵嚢を私が切り破り皆を出して，次の袋に一匹づつ入れるのです。こうすれば確です。何でもないことです。大抵の仔供は四回位は食ひ破ります。紙の袋にも同じような穴を開けて出て行きます。でも薄い絹の袋を破るものは一匹もゐませんでした。

この後にも澤山の問題が控えてゐるのです。私は例によつて何年でも機會を待つことにします。

マヨワセ絲　クサグモはマヨワセ絲を張ります。店網は勿論平面ですが，マヨワセ絲は縱に張られてゐるのですから獵場の面積が非常に大きくなるのです。長いのになると二米位のも見られます。又短いのは四圍の條件がそうさせた場合，笠みたいになつてゐるのもあります。これではマヨワセの用が達せられるとは思はれません。此處に疑問が湧いて來ます。“この絲は獲物をひつかける爲に作るものか？”動物の行動に，何々の爲め，を想定することは注意しなければなりません。昆蟲はクモの絲が見えないのです。(と云はれてゐますがオニ

グモの網の近くに來てよけて飛ぶ蟲も見られます。)ですから蟲がこのヨワセ絲の中に入り込むのです。林立してゐる絲に突き當つては避けるのですがどつちに行つても又突き當るのでまごまごしてゐるうちにクモが捕えてしまふのです。然しこの絲の振動に對しては網の主は割合に鈍感です。店網とは比較になりません。この邊のことは正確な調査が必要です。種々の器具を持つてゐる人に測定していただきたいものです。

このクモがマヨワセ絲に登つて行つて獲物をとらへるのは私は見たことがありません。店網近くに落ちて來たのを捉えるのですから，體が木登りして働くのに不適當なのかも知れません。それで感じてゐても行動を初めないのではないかとも考へられないことはない譯です。更にこのクモはマヨワセ絲を張らなければならぬ宿命を持つてゐるのか，と思ふとそうでもないのです。支える高い物の無い場合は作らんでゐます。痕跡もありません。此處から多數の疑問，問題が出て來るのです。マヨワセ絲を張る時の動き方にも興味があります。

ユーレーグモの戰術　ユーレーグモは「獨特な自己防禦の手段をもつてゐる。即ち敵の攻撃を受けた時，或はただ敵が近づいただけでも，脚を全部一束にして巣の中心にぶら下り，獨樂が回轉するやうな速度で身體を回轉させるので，それは巣の上でまるで霧のやうに見えるだけで，敵に攻撃すべき箇所を與へない。」（岩田譯）と W. H. Hudson が書いてゐます。そのクモは何種か判りませんが，日本にざらにゐる，イウレイグモ *Pholcus crypticolens* Boesenberg et Strand も同じようにブンブン廻りをやります。然しこれが韜晦戰術だとは速斷出來ません。第一に敵を見る視力があるのか，敵を判斷する智能が有るのか，これが問題なのです。人間の指を色んな速度で動かし嚇してみてもクモはびくともしません。ところが或る程度の强さを以て網にふれた場合は，それが何であらうと，風の場合でも獨樂廻りを初めます。(度重ねれば段々反應しなくなるのは當然です。）又ガラス器に飼養してゐるものを，敵らしいものなぞ決して見せず全體を動かしてもブンブン廻りを初めます。ですから擬人的に考へないで或る程度の刺激に反應する習性と見た方がよいと思ひます。

ハヘトリクモの觸肢　このハヘトリクモ *Menemerus confusus* Boesenberg et Strand は普通に見るクモです。彼が獲物を狙ふ時觸肢を頻りに動かします。これには何か効果があるのではなからうか，と一應考へても惡くはない筈です。ヘビが赤い舌をペロペロ出すのは相手に催眠術的効果を與へると考へる人もあ

ります。私もそう考へてゐます。ハヘトリクモは拍手を打つように單純に觸肢を動かすのでなく「タースケタマヘテンリオーノミコト」とやる時，拍つた手をすぐ開かず一旦下方に降すように動かすのです。このようにして早くやると奥行が出來て見えるものです。吸ひ込まれるように感ずるものです。ですからこれは獲物に對する一つの術と考へたくなります。然しよく見てゐると獲物に對して一番催眠術的効果の必要と思はれる時にはピタリと止めてしまひます。ですからこれはクモの術でないことが判ります。ヘビも同じで，自分の舌に催眠術的効果があるなんて考へてゐないのです。

シロガネイソーローグモ　寄生生活は種々の器官を退化さすと云はれ又其の他の理由で寄生を罪惡視する風があります。人間同志の場合には其の倫理が通用するのですが，動物全體に推し擴めるのは論理的に既に間違つてゐます。退化進化を人間的尺度を以て簡單にきめられない場合が多いのです。退化と見えても其の環境にあつては進化であることが寧ろ多いのです。シロガネイソーローグモ *Argyrodes bonades* Karsch は眞に美しいクモです。夕立が晴れて太陽が照り出した時，七，八匹のこのクモが群つてゐるのを見るのは本當に幸福です。その卵嚢を見ましよう。美術的な形，堅牢な構造，內部の合理的な設備など多士齊々のクモ界に於ても餘り數を見ない程のものです。居候して網を張る勞力から解放された時間と精力をこの方面や化粧に用ひるのでしようか。美を求めるのは餘裕が出來たからだと云はれます。（現在の人間には餘裕が無いから美を求めるのだと云つた方がよい。）このクモが餘裕が出來たから美を求めるのだとすれば癈頽的な美でなければならぬ筈です。其の三角帽のような腸脊部はどんな用があるのか私は知りません。生れ出た時もこのように美しいのです。假に癈頽的だとしましよう。然しその卵嚢は決して嬰退的のものとは思はれません。人間の贅澤奢侈は消費面に初まり生產面に及ぶのが通則です。この通則はシロガネの鱗粉によつて裝はれたイソーローグモにも適用されてゆくのでしようか。

ハナグモの網　ハナグモ *Misumena tricuspidata* Fabricius は網を張らぬもの卵嚢を守つてゐる時は食物をとらぬものと信じられてゐるようです。これに就いて私は二夜ばかり蚊にせめられながら徹夜して見てゐたことがあります。眞夜中になると卵嚢を離れ步き出すのでした。十センチ足らずの所から二本の絲を引き，卵嚢の傍で見張りをします。蚊よりも小さな蟲がそれに觸れた時，素早く出て行つて捕えて食ふのでした。これは網と云つてもよいと思ひます。